慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	御用! 御用だ!
Sub Title	"Freeze! You are under arrest!"
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.) ,p.177- 198
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2 : 事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

御用！御用だ！

関場　武

はじめに

このたび「慶應義塾史事典」に続いて「福沢諭吉事典」が目出度く完成、刊行された。慶應義塾関係者にとって、また福沢研究者・諭吉ファンにとって慶賀すべきことである。短時日の間に精力的かつ堅実に編集作業を進められた慶應義塾福沢研究センターを中心とする担当者各位ならびに慶應義塾大学出版会に敬意を表するものである。辞書・事典というものは、刊行された時には既に旧くなっているとはよく言われること。そして、誤りや不正確な点、誤植も、校正の際には気が付かなく、出来上がったものをやれ嬉しやと開いてみると、途端に見つかるもの。校正の七不思議の一つである。まだ活版印刷の時代であったが、小生もかつて辞書に関する論考で、「漢字」が何故かすべて「漠字」になっており愕然としたことがある。と申して今回上記両事典に

何か過誤を見つけたというわけでは決して無い。もし万一見付かったとしても落ち込む必要は無く、再刷り、再版の機会を捉えて訂正、追加なさればよく、そうでなければ時期を見て、この「近代日本研究」や「福沢研究センター通信」、ＨＰ等に正誤表や追加情報をお載せになればよろしいのである。先日正誤表をお送り頂いたが、名前が判明している購入者に送るというのも一つの手段である。執筆者が多い辞書・事典の表記の統一は大変な作業である。矢面に立とうとも或る一人の人物が始めから終わりまでを通覧し、あらかじめ原稿依頼の際に執筆者たちに通知しておいた一定の基準に則って、整理・統一をして行く。これでなければダメだとか色々と自己主張するひとたちは無視をする。執筆依頼の時に、「なお、表記等につきましては最終的に編集部で統一を取らせて頂きます。悪しからず御諒承を賜わりたく存じます」という一文を添えておくのも手である。その位でないと如何してもでこぼこが生じる。例えば、この拙稿で言えば、「漢字は原則として通行の字体に」という方針であるので、せっかく苦労して原資料に当り、その通りの表記（旧字体）にしたのに、と思っても致し方ない。精密さを競う資料集であれば話は別だが、ぐっと堪えて、あ、そうですか、ハイハイと従うのがよいのである。そうは言っても生じてしまったらどうするのかであるが、そうなったら記述に精粗の差や表記に不統一があるのがこの書物の特徴、個性であると居直っていればよいのである。再度申し上げるが、今回の二つの事典がそうであると申しているのでは決して無い。ややきつい言い方になってしまったが、小生の過去の経験から、万一、今後の参考にでもなればと申し上げた次第である。

Ⅰ

さて、辞書・事典を語るとき、必ずと言ってよいほど引き合いに出されるのが、例のA・ビアスの「悪魔の辞典」の辞書、辞書編纂者の項目[1]および、辞典、字典、事典の違いについての説明。前者はともかく、後者については、（1）【辞書・辞典】五〇音順やイロハ順、アルファベット順といった一定の基準に基づきことばを排列し、その意味や用法等を説明してある書物：ことばてん、（2）【字書・字典】部首別、画引き、字音・字訓別など一定の基準により漢字を排列し、その字義や用法等を説明してある書物：もじてん、（3）【事典・事彙】分野別あるいは五〇音順等一定の基準で事柄・事物を排列し説明してある書物：ことてん、百科事典などと説明するのが普通である。[2] この分類は勿論妥当であるが、新旧の辞書・事典類のすべてが、截然とこの三分類の中の一つに当て嵌まるわけではない。（1）と（2）とが一緒になっているものや、（1）から（3）までが一体になっているものがあり、「辞典」「事典」と銘打ちながら排列基準が曖昧で、辞書の体を成していないものも数多いからである。

ところで、最近、「ヤバイ」ということばが流行っている。この言葉は文献で見る限り江戸時代の後期からあるが、ヤバイ方面すなわちアウトローから出た語で、本来は良い意味に使われるものではない。[3] ところが今、若い娘さん達を中心とする若者達は、良い意味にも悪い意味にも使い、すべてをヤバイで済ます。ヤバイ単独、あるいはマジ・かわいい・ヤバイの三セットで日を暮らす者すら居る。かつて家に帰ると風呂・メシ・寝るの三語で済ますお父さん達が居たが、それどころではない。決して若くない小生もつい「ヤバイ！「近代日本研究」の原稿の締め切りが過ぎてしまった！」等と使ってしまう程である。実は辞書・事典にもヤバイものがある。検閲制度厳しき頃、思想用語辞典でなくとも隠語辞典やユーモア辞典でヤバイと看做され発禁を食らったものがある。例えば樋口麗陽著「〈皮肉滑稽風刺諧謔〉抱腹絶倒辞典」（大正九〈一九二〇〉年一〇月大明堂書

店）。これはA・ビアス張り、イヤそれ以上の攻撃的な皮肉を飛ばしている読む辞典であるが、表紙見返しに「注意　本書の内容中数箇所欠句或は全部削除したる所あるは其筋の注意により削除したるものなり。」と印刷した小紙片が貼ってある。全三百三項のうち軍人の項は全文削除、軍艦は「国民の」と書き出した後、空白が続き「をするもの」で閉じてあり何のことか全く分からない。その他、博愛主義、資本家、労働階級などにも大幅な削除が見られ、都合一〇項目に規制が施されている。また、栗田書店編輯部編「隠語辞典」（「新聞語辞典附録」）は昭和八（一九三三）年一二月の初版、一一年一〇月に改訂増補版が出、一三年三月二五日に十三版が出ているが、「天長節　旗日と同じ」が同月二六日検閲に引っかかり安寧禁止として三七、三八頁が切り取られ「三十七頁、三十八頁ハ其ノ筋ノ注意ニヨリ削除致シマシタ。御諒承願ヒマス」の紙片が貼付してある。そして、昭和三年四月の初版（弘文社）以降、指導を受けて文字を削った痕跡を残しながら結構出回った佐藤紅霞「世界艶語辞典」は、昭和一八年一二月に至って発禁となり、大戦後の昭和二一年一二月に中村書店から伏字を埋めたかたちで復活する。(4)

Ⅱ

これから俎上に載せる事典は、そういったものではなく内容的にヒドイという意味でヤバイものである。それは平成六（一九九四）年一〇月に財団法人自警会から自警文庫24として出された『〈捕物小説に学ぶ〉江戸用語の基礎知識』という事典である。書名は勿論大戦後間もない昭和二三年一〇月に時局月報社から出、現在に続いている『現代用語の基礎知識1948年版』（〈特集雑誌〉自由國民14・特別号）を襲うもの。A5判箱入

りタテ二段組四一八頁の本書は、はじめに平成六年十月警視庁警務部教養課長・篠原寛氏の序と、自警会事務局長の藤原鴻一氏の「発刊によせて」があり、目次を経て本文に入る。本文は五〇音順。悪場所、揚屋、浅葱裏～若衆歌舞伎、若党、渡り奉公までの三五一項目、それにあ行、か行といった各行の末に「脚注」と称する関連情報が九九項載る。その二七一番目の項目として出て来るのが図版に掲げたこれから問題にする「百物語【ひゃくものがたり】」である。なぜ「百物語」に目が行ったかというと、かつて小生は江戸時代初期の散文文藝である仮名草子を調査していたことがあり、昭和五二年四月に勉誠社から近世文学資料類従・仮名草子編の一本として『百物語　私可多咄』の解題付き写真版を出しているからである。それで偶然「百物語」に目が留まった。そうしたところ、解説に色々と問題があることに気が付いたのであり、最初からあら捜しを目的に本書を見ていた訳では無い（以下図版を参照されたい）。また、本書のことを論い貶める意図があるわけでもない。事実誤認の指摘である。

『江戸用語の基礎知識』表紙

百物語の仕方にはいくつかのパ

ターンがある。はじめの「夜、人びとが集まり」以下の説明に間違いは無い。[5] ところが、下段の二行目「こういう怪談会や怪談を百集めた噺本（はなしぼん）、『百物語』が、万治二年（一六五九）に出された」以下が、全くイケナイ。たしかに『百物語』は万治二年に出版された仮名草子であるが、怪談を百集めた噺本では全くないのである。読めばすぐわかるが、たとえば、

（上）卅四　わる口いひのおどけ人ありけるが。あたまのきんかんなる人を見て。たるぼ〳〵とのみよびて。名をいはざりければ。さる時此人、われらをたるぼとはなにとていふぞとたづねしかば。かの人申けるは。先ほたるはしりがひかるものなり。其方はあたまがひかれば。ほたるをうちかへして、たるほと申といひてわらひけるとなり（目録題：人に異名付る事）

といった笑い話や、一休、宗祇、武田信玄、赤松圓心らに関する逸話、足利尊氏と夢窓国師、藤原定家と家隆の歌の贈答、細川幽斎と雄長老の句の付け合い、李太白や杜子美らの詩句の解釈と鑑賞等を載せたもので、中には、

（上）三　或寺に人なぶりの浮蔵主有けるが。門外をかうじ売の通けるをよび入、様々のおどけを云てなぶられけるに、此商人をどけものなりければ、口をたゝきて日を暮しけるに、御坊はやかへられよ、門をさすぞと申されければ。彼もの申やうは、かうじ門を出ずといふ。御坊もよかりけり、門外へをし出して、僧はたゝく月下の門とてたゝかれけれは、笑て帰ぬ（目録題：麹売の事）

といった故事（この場合は唐の詩人賈島が「僧推月下門」という句を得たが、「推（おす）」を「敲（たたく）」とした方が良いのではと悩み、韓愈に教えを乞い「敲」に決定したという「推敲（すいこう）」の故事。前半は勿論「麹売」の「麹」に引っかけて「好事門を出でず」を利かせてある）（『昨日は今日の物語』『戯言養気集』といった同時期の他の噺本にも類話が載る）や古典の知識を踏まえた話も散見される。[6] やや長くなるが序の原文は次の通りである。

此物語を百物語と名づくる事は。有夜の徒然なるまゝに。こざかしき童よりあつまりてあそびしに。一人申出せしは、草も木もわが大君の国なれば、いづくか鬼のすみかなるらんとはいへども。いにしへは、あの山に鬼あり、此村にはばけ物出しなどゝ伝へし事おほし、此比の御代は、四海なみしつかにおさまり。風枝をならさぬ時なるにや。世中にふしぎなし。

まことなるや、いにしへ人の語り伝しは、何にても百物語をすれば、かならずこはき物あらはれ出るとうけ給はりし。今宵は雨もそぼふり物すごき夜なれば、しめやかに百物語して、こはきもの出るか心みて、後の世のためしにせむといひければ。をの〳〵然るへしとて、はや物語をはじめける。先硯料帋を取出し、其中に一人筆とりにて書付けるに、かたはらいたき事共、我一〻と語しほどに。語すでに百にみてんとする、今一つふたつになりし時、すはやと子どもさはぎあひて、灯をふとくかゝげて、すみ〳〵を見まはし。にげ尻になりてかたりしに。はや物語はもゝにみちけれ共、さらにこはきものも出ざりければ。惣の子共口々にいひけるは、むかしの人は何事をかいひをきしとて、あざけりあへり。

百物語【ひゃくものがたり】

夜、人びとが集まり、青い紙で張った行灯に百本の灯を入れ、こわい話を交代で語るたびに灯を一本ずつ消してゆく。百話が終わったときに化物が現れる、と言い伝えられて流行した怪談会の遊び。

「七偏人が百物語をしたのは、こんな晩でしょうね」と、わたしは云い出した。

「そうでしょうよ」と、半七老人は笑っていた。「あれは勿論つくり話ですけれど、百物語なんていうものは、昔はほんどうにやったもんですよ。なにしろ江戸時代には馬鹿に怪談が流行りましたからね。芝居にでも草双紙にでも無闇にお化けが出たもんです」

◉岡本綺堂『半七捕物帳・津の国屋』より

この遊びは、武士の間に練胆の会として始まったようだが、江戸時代に入って庶民の集まりなどで盛んに行われたといわれている。

こういう怪談会や怪談を百集めた噺本、『百物語』が、万治二年（一六五九）に出された。その序文にはこんな意味のことが書かれている。〈こざかしい子供たちが集まり、今夜は雨も降ってもの恐ろしい夜だから、百物語をして古来のいい伝えが本当かどうか試してみようと始めた。百に近づいても何の変化もない。そのとき一人がいった。こわいものはもう出ている。みんなの着ているきものの糊がきいてコワイ〉

落語の種にもなり、以後怪談噺が生まれた。

また井原西鶴の『好色一代男』の〈百物語に恨が出る〉では、遊女がだました客の幽霊が現れ、遊女に借金の催促をされて姿を消してしまう話になっている。

化物を一本ずつ消す物語り　柳多留

「百物語」（『江戸用語の基礎知識』）

たひら、みな〳〵こはきものなり。おさまりし此御代には、これらよりこはきものは、百物語の事はをきて、一貫物語にても出まじきぞと申ければ、皆々色をなをして。げに是はいはれしとて、大笑して立さりぬ

其中にこざかしきわらは、横手をはつたと打て、こはき物こそ出けると申ければ。童共肝をけし、いづ方へいかなる物出けると、ふるひ〳〵問ければ。しづまり給へかた〳〵、たゞ今咄し給ひし其中に、こはきもの出たり、かのやつこがきたりし衣裳の色〳〵を見給はずや、牛首布のかたびら。のりごはのしぶか

傍線を施した部分にあるように、糊でごわごわになっているのは「みんなの着ているきもの」ではない。今したばかりの話の中に出て来た例の奴（やっこ）が着ていた衣装：牛首布の帷子、糊ごわの渋染めの帷子、これらが強い（こわい）のである。そして、この平和な時代に在っては、これ以上に「こわい（＝強い）」ものは無く、百物語を何度したって「怖い」物なんか絶対に出てくる訳は無いというのである。それが如何して百物語をしていた子供たちの着物になってしまうのか、全くもって意味不明である。その、たった今した咄とは、下巻第五十話、すなわちこの『百物語』の最終話（目録題：しぶかたひらの事）のこと。そこでは、

其たけ六尺あまりのおとこ、大ひげをねぢあげ。まづはだには牛首布（うしくびぬの）のかたびらき。上にはふとぬの、しぶぞめに、七八百がのりをかい。馬のかわのふと帯（をび）しつかとしめ。くまの皮（かは）の長（なか）ばをり。まつすぐなる大小十もんじにさしこなしたるけしき。身の毛（け）もよだつばかりに候ひし（以下略）

といった具合にとてつもなくえぐい東国の奴（やっこ）の風体が紹介される。そして、死んだも同然、龕（＝棺桶）に乗り敵から奪った鎧を振り回して暴れまくる鎧龕兵衛（やりがんひやうゑ）のその名前の由来が語られている。すなわち百物語の約束に則り、最後に「身の毛もよだつばかりに」怖く強（こわ）い奴（やっこ）を登場させているのである。この『百物語』は上手く作ってある。普通百物語というと怪談話であるので、それを期待して読み進んで行こうとする、あるいは読み通してしまった読者に対し、序文でそうではないのですよと予めしっかりとお断りをし、非難を回避するとともに苦笑いさせているのである。

Ⅲ

次は同じく『江戸用語の基礎知識』の、右に続く説明である。「落語の種にもなり、以後怪談噺が生れた」。これも傍線を施した部分におかしなところがある。怪談噺はそれ以前からある。以後ということは絶対無いのである。そして問題は次、「井原西鶴の『好色一代男』の〈百物語に恨が出る〉では」という個所である。結論を先に言えば、天和二（一六八二）年刊の『好色一代男』にそんな話は無い。あるのは貞享元（一六八四）年刊の『諸艶大鑑』なのである。同書は題簽・目録題に「〈好色二代男〉諸艶大鑑」とあり、目録のそれには「こうしよく」「しよゑんあふかゝみ」と振り仮名が付く。『好色一代男』が大当たりしたので、柳の下の泥鰌よろしく再度ヒットを狙い、一代男の主人公世之介（よのすけ）の遺児世伝（よでん）を巻頭・巻末に登場させて、遊里の裏面やそこに生きる人間の諸相を描いた佳作であるが、その巻二の五に「百物語（ひやくものがたり）に恨（うらみ）が出（いづ）る」があるのである。話の後半、眠れないままに年明き前の肝の据わった女郎を中心に何人かで百物語を始める。最初は化け物の話などをしていたが、百以上しても何も出ず、話は、自分に入れあげさせ、そのために没落してしまったかつての馴染みの客達の噂話となる。自分達は流れの身と言いながら心変わりをしてしまい可哀そうなことをしたと悔やみ、涙を流したりしている時に、突然家鳴りがし、今しがた話した男達が零落した姿で幻のように現われ、遊女から愛の証にもらった心中立ての品々：切り放した爪や黒髪、毎日の勤めを記録した帳面を「如何してくれるのだ」とばかりに投げつけ嘆く。女郎達は一同恐れをなし、様々に詫びるが家鳴りは止まない。その時しっかりした女郎が居て、「じゃあ、皆さん方の揚屋の勘定の未払いの分はどうしてくれる

享保一一年版『化生物語』巻一挿絵（部分）

んですか？」と声高になじると、男達の幽霊はコレハマズイとばかりに姿を消したという話である。

百物語の典型的パターンは、終わりの方になると、上の方から怪しいものが落ちて来たり出たりするというもので、延宝五（一六七七）年刊の『宿直草』（とのゐぐさ）巻二の三「百物がたりして蜘（くも）の足をきる事」に挿絵とともにある。[7] また、後のものになるが宝永五（一七〇八）年刊の『かす市頓作』巻四の「食類百物かたり」では、侘しい男達が、食物を題材に百物語をしたら、旨いものが出て来るのではと始めたところ、五十番を過ぎた頃、うどん桶や五升樽、吸い物などが次々と

天井から降ってくる。しめたという訳で呑みかつ食べまくっていると、八十番目あたりになって家鳴りがし、前掛けをした大男が天井から落ちてきて懐から書付を出し、これが是までの分の請求書でございますと手渡すというオチになっており、その情景を描いた挿絵もある。『好色二代男』の話も似たところがある。挿絵には女郎たちの話しに出た零落したモト彼たちの姿が克明に描かれており、話の理解を助けている。西鶴という人は、西鶴だけを読んでいると、それ程とは思わないかもしれないが、他の作者が書いた作品を読むと、その筆力の素晴らしさがわかってくる。この話もそうで、彼一流の語り口でよどみ無く話が進行している。(8)

いずれにしても、本書『江戸用語の基礎知識』のこの記述はあきらかな間違いである。本書の巻末には『江戸東京年表』『日本大百科全書』以下二一四点の「参考引用文献一覧」が載っているが、その中の間違っている何らかのものの受け売りか、それとも西鶴と言えば「一代男」で「二代男」の存在を知らなかったのか、詳細は不明である。終わりにある「化物を一本ずつ消す物語り　柳多留」は、文化五（一八〇八）年仲夏序刊の川柳の選集「誹風柳樽」の第四十六篇27オ六會目「化物一題」に「化物を壹本ヅ、消す物語り　竹子」のかたちで出てくるもので、間違いはない。

Ⅳ

さて、最後は本項目の上段、岡本綺堂の「半七捕物帳・津の国屋」を引いている部分である。ここは間違いという訳ではないのであるが、注文を付けたい点がある。「「七偏人が百物語をしたのは、こんな晩でしょうね」と、わたしは云い出した」という所を、もう少し前、この物語の書き出しの部分から引いてほしかったのであ

る。その始まりの部分は「秋の宵であった。どこかで題目太鼓の音がきこえる。この場合、月並の鳴物だとは思いながらも、じっと耳をすまして聴いていると、やはり一種のさびしさを誘い出された」とある。[9] そこから出さないと「こんな晩」というのがいつ頃のどんな晩であるのかが判らないし、下敷きにしている梅亭金鵞作の滑稽本『〈妙竹林話〉七偏人』五編一五冊（安政四～文久三〈一八五七～六三〉年刊）を活かしていないことになるのである。[10]「七偏人」の「百物語」はその四編（文久二年刊）の巻之中に始まる。題名は勿論かの竹林の七賢を意識したものであるが、それに「瀧亭大人が八笑人は、八人の連をあげ、又和合人は、六人の笑客を集へ、滑稽洒落の妙をはき、人を笑はし腹の皮をよぢらしし、其筆先の浦山しさに、八人と六人の中をとり、七人の懶堕ものを引出して、七偏人といふ名を付、出放題なる戯言をものし」と、五編の叙で自ら述べている如く、瀧亭鯉丈らの「〈花暦〉八笑人」（文政三～嘉永二〈一八二〇～四九〉年刊）、「〈滑稽〉和合人」（文政六～弘化元〈一八二三～四四〉年刊）の二作が重なる。内容は単なる茶番やいたずらの域を飛び越えたもので、あくどく汚らしい悪ふざけとなっており、小生は通読に耐えない。百物語については、「エ下太公この秋雨の極森閑と淋しいとこから思ひ付たのだが、大愚が來たら晩まで引留て置、百もの談話といふのを押ぱじめ、驚かして遣うといふ狂言だ」（四編巻之中）とか、「秋の末ツかた、しかも此様に雨の降夜で御座います」（巻之下）等とあり、挿絵にも「だん〳〵に消す行燈の明りより暗きしゆかふの百物がたり」という狂歌が載る。それらを考え合わせると、ここはどうしても季節は秋、時は雨の降る夜ということになる。綺堂が記している「秋の宵」は消してはいけない大事な設定なのである。字数の関係等、事典の執筆には苦労が伴うのであるが、何とか工夫をしてほしかったところである。

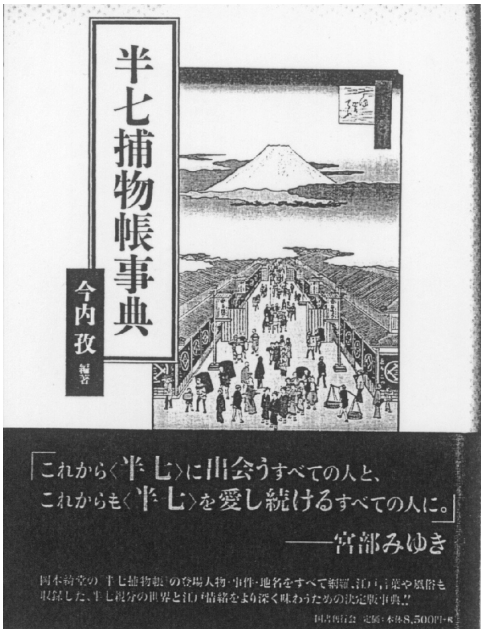
……ということで、たまたま「百物語」という項目が目にとまったため、思わぬ誤りが見つかり困惑してい

る次第。一つの項目でこうも怪しい記述が重なると、他の項目ももしかして……ということになる。本書は「捕物小説に学ぶ」という冠句が付き、岡本綺堂の他に、野村胡堂の「銭形平次捕物控」や横溝正史の「人形佐七捕物帳」、佐々木味津三「右門捕物帖」、柴田錬三郎「岡っ引きどぶ」など計一〇名の作家の作品を引き説明をしているのであるが、それが本当なのかどうか、疑念も生じてきてしまうのである。ちなみに綺堂の「半七捕物帳」からはこの「津の国屋」で八回、「津の国屋」を含めた全体で一九三回程引用している。しかし、これほどの間違いを仕出かしているのであれば、言語道断、不届き千万、「御用！ 御用だ！」、「神妙にお縄を頂戴しろい！」の世界である。編集・刊行ともお上の所業であるだけに、余計残念な気持ちになる。こんなにも事典が信じられないとすれば、どうしたらいいんだ！ 如何してくれるんだ！ という感じである。

V

さて、これに関連して、も一つ「ヤバイ」事典がある。それは良い意味での「ヤバイ」事典で、その名もズバリ『半七捕物帳事典』。シャーロキアンでもある今内孜（いまうちつとむ）氏の編著。平成二二（二〇一〇）年一月、国書刊行会刊。A5タテ三段組カバ、口絵写真、索引とも一〇一二頁。根っからの半七ファンが一〇年の歳月をかけて、地道かつマニアックに資料を蒐め、整理分類、五〇音順に排列・説明した事典である。凡例によれば、「本書は岡本綺堂著『半七捕物帳』全六九編をもとに編んだもの」で、「作品の引用は、主に岡本綺堂が存命中の一番新しい春陽堂版全集を底本にし、その全集に収録されていない作品に関しては同光社版全集を底本にした。また全体に渡って新作社版全集と春陽堂文庫版全集を参照した」とある。その際「仮名遣いは現代仮名遣いに、

旧字体は新字体に改めた」由である。本文は藍、相合傘、相生町、相方～藁人形、藁の円座、悪い足、椀盛まで。それに「史実と創作の融合」、『半七捕物帳』執筆の動機、「捕物帳」世に出る、綺堂の書斎など、コラムが五七ある。付録は「岡本綺堂が語る『半七捕物帳』、『半七捕物帳』発表誌一覧、主な登場人物一覧、古地図に見る半七親分の足跡など六種、索引は作品名、江戸言葉など、芝居関連の科白・記述など、芝居・落語の作品名、書名など、故事伝説・巷談・寓話関連の五部に分けそれぞれ五〇音順に排列。参考文献は前出『〈捕物小説に学ぶ〉江戸用語の基礎知識』を含む七九点を挙げる。今後、「半七捕物帳」を調べる際には必ず参照すべき事典である。小生などは、本書によって「津の国屋」の初出誌ならびに掲載時の副題が「捕物奇談」であることを知った。有難いことである。但し読者・利用者というものは勝手なもので、すぐに無いものねだりをする。編者が言われる「全集」という呼称は如何なものかという感慨を抱くし、またその「全集」等の収録作品のリストや詳細な書誌解題もあって欲しかったと思う次第。それにしても漢字を新字体に改められたことはともかく、仮名遣いを現代仮名遣いにしてしまわれたことは、小生にとっては残念至極である。



『半七捕物帳事典』表紙

ところで、『江戸用語の基礎知識』と直接

関係は無いが、もう一つ同じシャーロキアンが著されたヤバイ辞典がある。その名を『江戸川乱歩小説キーワード辞典』と言い、平成一九年七月東京書籍の刊。著者は平山雄一氏、監修が新保博久・山前譲の両氏。A5判、函入り、タテ二段組索引とも八八二頁。付録としてCD-ROMが付く。キーワードはアームストロング、相生橋、相川技師長〜ワルサー、ワンタン屋、腕白、英字記号としてA、A湖、A子〜×村、○○造船株式会社、○○病院。それに作品一覧、参考文献、索引を付す。凡例に「定本について」（注：これは「底本」と言った方がよいと思われる）があり、「本辞典は『江戸川乱歩推理文庫』（全六十五巻、一九八七〜一九八九年刊、講談社）のうち、小説作品である第一巻『二銭銅貨』から第四十七巻『新宝島』のそれぞれ初版を定本とした」云々とある。説明は要を得て的確。乱歩の小説を読む際の必携文献と言える。凡例の第五項に「本辞典は江戸川乱歩作品の愛読者・研究者を対象としているので、必要に応じてトリック、犯人などを随所で明かしている。利用に当たっては十分注意されたい」とあるのは、普段この方面に疎い小生にとって成る程と感心させられた注意書きであった。項目間の関連の指摘も密で、本辞典を見ていて、逆に原作品を読みたくなるという効果もある。例えば項目の中には「七偏人」があり、出典は『書下し推理小説全集』1（昭和三四〈一九五九〉年一一月桃源社）に収められた「ぺてん師と空気男」。「梅亭金鵞の作品で、プラクティカル・ジョークを題材にしている」という原作に則った説明がある。[11] 参照項目の梅亭金鵞については殆ど一行情報しかないが、プラクティカル・ジョークはプラクティカル・ジョーカーと共に立項され、「手の込んだいたずら、冗談のこと。プラクティカル・ジョーカーはその実行者。伊東錬太郎が研究をした」とある。そこで伊東錬太郎を見ると、その妻美耶子が出て来、美耶子を見ると不倫の相手に嵌められた野間五郎が出、野間を見ると「物語の語り手で、物忘れの大家であだ名を「空気男」という」云々と説明があり、さらに「空気男」へと繋がる。一方「作品一覧」

の「ぺてん師と空気男」には発表年や初刊、あらすじが載る。

しかし、愛読者・研究者のための辞典ということであるので、本書の利用者の皆様先刻ご承知ということなのであろうが、作品年表や作品集・全集の収録作品一覧が無いのは、小生のような初心者にとっては辛い。文学関係で言えば、何人かの作家について個人事典、作品事典が出ているが[12]、辞書・事典に完璧ということは無いと思っていてよい。すぐれたもののように思えても、物足りない点や誤謬がしばしば見つかる。はじめに申し上げたが、それが辞書・事典の宿命なのである。完璧を期すにも、項目数や字数のほか、頁数、価格、発売予定日等を含む販売政策上の制約が絡み、口で言う程簡単ではない。自分達が編集したものの誤りを知った場合、苦い思いは当然あるが、気に病むことなく、より良いものにするために地道な改訂作業を積み重ね、なるべく早く悪びれずにその事実と訂正を公表する。それが一番良いのである。

注

（1）「自選全集第七巻」一九一一年所収 THE DEVIL'S DICTIONARY。西川正身選訳『悪魔の辞典』（一九六四年六月 岩波書店）によれば、「辞書（DICTIONARY）」は「一つの言語の自由な成長を妨げ、その言語を弾力のない固定したものにするために案出された、悪意にみちた文筆関係の仕組み。とはいうものの、本辞典に限り、きわめて有用な製作物である」。（「辞書編纂者（LEXICOGRAPHER）」は長文に亙るので省略する。翻訳について見られたい）。なお、同氏には、その後、「悪魔の辞典」の前身に当たる「冷笑家用語集」（一九〇六年）、E・J・ホプキンズによって編纂された増補版（一九六七年）の三本を併せて編訳した『新編悪魔の辞典』（一九八三年五月 同）があり、現在では岩波文庫（一九九七年一月）に収められている。他に全訳としては、奥田俊介・倉本護・猪狩博『〈完訳〉悪魔の辞典』（一九七一年一月、創土社）（一九七五年四月の角川文庫・改訂縮約版あり）、郡司利男『ビアス悪魔の辞典』

（一九七四年八月、こびあん書房）（「対訳篇」と「評註篇」に分かれ二冊一函。奥田氏らの訳を厳しく批判）、同『続・悪魔の辞典』（一九七七年五月、同）（対訳形式でホプキンズ版よりビアス全集版と重複しない項目や記述内容の異なる項目を訳出、奥田氏らの訳を再び批判）、同『正・続全訳悪魔の辞典』（一九八二年三月、同）（原文を削り、正・続は別立てのまま合冊）、奥田俊介『〈新撰・新訳〉悪魔の辞典』（二〇〇〇年一一月、講談社 KODANSHA SOPHIA BOOKS）（全集収録以外の項目も選定、一四〇〇項目）、筒井康隆『筒井版悪魔の辞典〈完全補注〉』（二〇〇二年一〇月）（DELL PUBLISHING 版の訳、郡司氏の訳および評註篇に助けられた旨の前書きあり）（二〇〇九年一月、講談社＋α文庫、加筆・修正二冊本あり）がある。

（2）小学生向けのものであるが金田一京助編『〈小学館〉学習国語新辞典』全訂第二版（二〇〇六年一月）では、字典、事典、辞典の順に立項しそれぞれ説明した同じ頁に、「おもしろコラム」としてイラスト入りで、「「字典」は漢字の読み方と意味を、「事典」は、いろいろな事がらを、「辞典」はことばの意味を、それぞれ説明したものです。ちがいがわかるように、「もじ典」「こと典」「ことば典」とよんで、くべつすることがあります」（振り仮名略）と再度丁寧な解説がある。

（3）ヤバイは短縮形ヤバでも使われ、両者とも『日本隠語集』（広島県警部稲山小長男編　明治二五年八月、広島・後藤待賓館蔵版）に既に載る。同書は部類別かつ地域別になっており、ヤバイは各地の例が載る。語意をよく表しているものとしては第一類言語及ヒ動作之部の大阪府管内ニ通スル語の「ヤバイ（又ハヒーヤン：危キヿヲ云フ、則チ犯罪ノ発覚セントシ、又ハ逮捕セラレントスル場合ノコトヲ云フ」がある。また、語源については二通りの説がある。一は「やば：刑事巡査―隠語「やばい」（危虞ノ念）ノ転訛」「やばい：刑事巡査―危虞ノ念慮ヲ意味ス」「やばなを：売春婦」（富田愛次郎監修・高芝羆著『隠語輯覧』大正四年一一月、京都府警察部）（注：同一〇年一月刊改題本『隠語辞典』アリ）、「矢場：1、表面大弓場にて内々に女を抱え客を引かしむる家。2、不都合なること、奇怪なること、関西の方言」（自笑軒主人『秘密辞典』同九年六月、千代田出版部）、「ヤバ（矢場）私娼宿、揚弓を看板にして密淫

売せし宿」「ヤバオンナ（矢場女）揚弓場の雇女、内実は売春婦のこと」（太田柏露『隠語辞典』昭和三年一一月、文僊堂）、「やばい：身の危険なこと。危険な場所のこと。或は犯罪発覚せんとする場合。又は下手をしたこと。刑事のこと大阪地方のこと等をいふ」「やばなを：「矢場の女」といふ意にて売春婦のこと。「矢場」参照（注：矢場についての説明は『秘密辞典』1の丸取り。通俗的な辞書にはとくにこの手合いが多い）。「なを」は女のこと」（樋口栄『隠語構成の様式并其語集』同一〇年六月、大阪府警察部内警察協会大阪支部）などを参考に、矢場＝アブナイ場所から来ているとするもの、もう一つは「やばい（犯）：危険なる事をいふ。夜間匍匐する意から名けたものであらう」（宮本光玄『かくし言葉の字引』昭和四年一一月初、同一二月改訂版、誠文堂）（注：同二五年一〇月グリンハウス刊、笠井緑編、改題修訂本『隠語辞典』アリ）、「ヤバイ：危険なこと。危険な時は夜、匍匐して呼吸をこらすから」（長岡規矩雄『〈時勢に後れぬ〉新時代用語辞典』同五年七月、磯部甲陽堂）（注：同年一一月文武書院刊、増補改題本『〈新時代の〉尖端語辞典』アリ）、「やばい（犯）：危険なことをいふ。夜匍からの転語」（栗田書店編集部編『新聞語辞典附録隠語辞典』同一二年五月改訂増補十一版、栗田書店）のように、辞書の内部で説明のあるものである。「夜間の匍匐」とか「夜匍」はいささか苦しく、二つの中では前者の説の方が妥当であろう。

なお、今回取り上げた岡本綺堂「半七捕物帳・津の国屋」にはお兼という矢場女が登場する。最終章の九に「お安の幽霊に化けたのは、浅草のお兼という矢場女で、見かけは十七八の初心な小娘らしいが、実はもう二十を二つも越しているという莫連者で、熊吉の世話でこれもこの一件の徒党に加わったのであった」とある。さすがに的確である。

（4） この戦後版は、わら半紙に刷られているが、その奥付は上部が切り取られ、管見に入った一本はガリ版刷りで「昭和廿一年十二月五日印刷／昭和廿一年十二月廿日発行」と記した紙片を貼り、定価の部分にも「定価拾八円」と謄写版印刷をした小紙片を糊付けする。他の一本は年記の部分が活版印刷の紙片、定価の部分も活版で拾五円とありさらにその上から25の青ゴム印を捺してある。大戦後間もなくの頃の出版界の混乱を示す一例である。なお、本書には慶應義塾にとって不名誉なことばが載っている。「トラガソ（注：「ソ」は「リ」の誤植）（虎狩）慶應学生連に依つて

初められたる通語にして、慶應学生が、虎の門女学校（東京女学館今は青山にあり）の生徒を待ち受け、其の後を追つ駆けることを云ふ。即ち虎の門の虎を題目として追ひ廻すことを狩とし、女学生の尻を追ひ廻すことを加藤清正にちなんで「虎狩」と称したのである」とある。ちなみに大正末から昭和初期にかけて流行ったモダン語辞典の中にも、慶應関連の別な不名誉、であるがちょっぴり可笑しいことばが載る。曰く「でかる　慶應で発明された言葉で怠け遊ぶ意味」（『〈時勢に後れぬ〉新時代用語辞典』）、「でかる　慶應義塾の学生が云ひ出した言葉で、怠け遊ぶ意味である。例：今日はどうも勉強する気になれないから、ひとつでかるかな」（小島徳彌著・昭和六年一一月、教文社刊『分類式モダン新用語辞典』）。勿論この語が「デカダン」から来ていることは言うまでもない。『新時代用語辞典』の「和製英語」の部に「でかる　デカダンを動詞化した語であつて、なまける、遊ぶ、だれる等の意」と出ているそれで、サボるやネグる等と同じである。

（5）　例えば浅井了意の怪談話集『伽婢子』（おとぎぼうこ）（寛文六〈一六六六〉年刊）巻一三―八（すなわち本書の最終話）「恠を話ば恠至る」（目録題「百物語の事」）には、「むかしより人の云ひつたへし、おそろしき事。あやしき事をあつめて百話すれば。かならずおそろしき事、あやしき事ありといへり、百物語には法式あり、月くらき夜。行灯に火を点し、その行燈は青き紙にてはりたて、百筋の灯心を点じ。ひとつの物語に灯心一筋づゝ、引きとりぬれは。座中漸々暗くなり。青き紙の色。うつろひて。何となく物すごくなり行也。それに話つゞくれば、かならずあやしき事、おそろしき事あらはるゝとかや。下京邊の人五人あつまり。いざや百話せんとて。法のことく火をともし。めん〳〵みなあをき小袖着てなみゐてかたるに。」云々とある。

（6）　仮名草子『百物語』の版本には次のようなものがある。Ⅰ類本（A）万治二（一六五九）年初夏上旬　松長伊右衛門版、大本二冊。（B）『聖泰百物語』〔元禄〕頃刊、大本四冊。Aの改題分冊本。序文の後段に「おさまりし此御代には、これらよりこはきものは、百物語の事はをきて、一貫物語にても出まじきぞ」とあるところから想を得ての命名か。（C）『世説雑話』宝暦四（一七五四）年正月　田原屋平兵衛版。Bの改題・修遞版。大本四冊。これも、江戸

初期の笑話本は、例にあげたように、必ずしも笑いばなしだけではなく、機知に富んだ話や実話、故事・因縁話等、雑多なはなしから成っており、雑話集としての性格が強い。勿論新しい作品に見せかけるための改題であるが、内容を見ての改題かもしれない。Ⅱ類本（d）明暦二（一六五六）年八月版。小本三冊。（E）万治三年二月　山本九兵衛版。絵入り中本三冊。A本の下巻第二八話（はかなき物語の事）の代わりに紀貫之冠（きのつらゆきかふり）をとす事が入っている。（F）同後印修逓本。E本の内題や尾題、柱題・刊記の一部を削る。中本三冊。石川俊一郎氏のご教示によれば、Ⅰ類本に中本で絵の無い二冊本（中巻欠か）がある由である。

（7）管見に入った『化生物語』は巻一と五の零本。巻一は『宿直草』の序文と巻二、巻五は同じく巻四に当たる。柱刻は白口で巻分けと丁付のみ。巻一は序文一、本文三二丁、巻五が二九丁。巻一の丁付に二十九、又二十九と重なる個所がある。本文は（巻五）第十七虵（へび）をうむをんなの事「宮ゐのしるしも、すぎし代（よ）ならで、今もかゝる事はんへり」と『宿直草』巻四―十七と同じ行文で終わるが、続けてすぐに「此書享保二年改板候へ共」と入木による一文があり、そこで切れ、二行分の空白を置いて左に「享保十一年今月吉日改正／寺町四条下ル町／菊屋長兵衛板」と刊記がある。この部分刷りが悪い。この他、末に「京寺町四条下ル丁／菊屋長兵衛板」とある「目録」が一丁分あり、一休諸国物語　全部五冊・ひらかなゑ入～誹諧打出槌　全部一冊・笠付前句付までの計二三点を載せる。宝永～享保頃の浮世草子類が多い。本書の広告もあり「化生物かたり、全部五冊、ひらかな絵入、ばけ物ばなし」とある。『宿直草』は後印本や修逓本の関係が複雑である。本書がどの版の後印或いは修逓に当るのかについては軽々に判断出来ない。後考を俟ちたい。

（8）〔〈好色二代男〉諸艶大鑑〕のテキストは色々あるが、近年のものでは『決定版対訳西鶴全集2』（平成四年五月、明治書院）が原文と現代語訳、注釈、語句索引付で読み易い。また『新編西鶴全集第一巻・本文篇』（平成一二年二月、勉誠出版）は、原文の影印と翻刻が対照になっている。注釈は無いが挿絵については説明があり理解に役立つ。『宿直草』は外題「御伽物語」の名で、小学館の『新編日本古典文学全集』64・仮名草子集（平成一一年九月）に原

文と現代語訳・注付で収められているものが挿絵についての説明もあり便利。

(9) 「半七捕物帳・津の国屋」は「娯楽世界」大正九年六～八月号に連載されたもので、夙く新作社版（大正一二～一四年）や春陽堂版（昭和四年）の『半七捕物帳』、それに著者自選の平凡社版『現代大衆文学全集11・岡本綺堂集』（同）に収められているが、未見。今便宜上光文社文庫・時代推理小説『半七捕物帳（二）』（昭和六一年）に拠った。なお、光文社文庫版は青空文庫に収録されており（平成一九年一一月一七日修正版）、一方新装版（平成一三年一一月）も出ている。また、ちくま文庫に北村薫・宮部みゆき編『読んで、「半七」！』（「半七捕物帳傑作選」一）（平成二一年五月）がある。（青空文庫閲読については松村友視氏にお世話になった。御礼を申し上げる）。

(10) 「〈妙竹林話〉七偏人」のテキストは幾つかあるが、昭和二年一月に出た『日本名著全集・江戸文藝之部：滑稽本集』（日本名著全集刊行會）に収められたものが、他と比べ校訂がしっかりしている。本稿もそれに拠った。

(11) 「ぺてん師と空気男」3「ジョーカー」に「日本でも滝亭鯉丈の『八笑人』や梅亭金鵞（ばいていきんが）の『七偏人（しちへんじん）』などが大がかりなプラクティカル・ジョークを題材にしている。しかし、あのジョークは大がかりなわりに、創意は乏しいですね」云々と伊東錬太郎に語らせている（光文社文庫・江戸川乱歩全集22巻、平成一七年九月による）。同全集は新保博久・山前譲氏の監修。本作品についての詳しい解題と校異、註釈がある。また、同全集29巻『探偵小説四十年（下）』（同一八年二月）追記「昭和三十二年以降・四つの著書」に、乱歩自身の述懐がある。

(12) 近年は「事典」と銘うたずに、「全作品ガイドブック」とか「全仕事」と称しているものもある。例えば熱烈な半七ファンである宮部みゆきには『宮部みゆき全小説ガイドブック』がある（平成二三年五月　洋泉社MOOK）（A5判二二四頁）。ミステリ&SF、ファンタジー&ジュブナイル、時代小説の三部に分け、計四七作を紹介する。三には近作の「おそろし―三島屋変調百物語事始」「あんじゅう―三島屋変調百物語事続」も入っており、コラムに「百物語事始」、トピックに「百物語の本当の作法」がある。微に入り細に入りのものではないが、作品年表やインタビューなどもあり、程良いガイドブックとなっている。